

# アートの風



歴史の音がする。風が吹いている。いい美術館だ。 水上 勉



宮地志行。知らない名前だった。先日、丸山晚霞の資料を持っているということで、その孫にあたる人から連絡をもらった。その資料はホームページでも見ることができるといので、早速開いてみたが、私はその資料よりも宮地志行の作品に目を見張った。

作品をいくつか紹介してみますが、その実力は相当なものを秘めていたと判る。冒頭に記した資料には、当時の画壇における重要人物との関係を示すものも多くあるのだが、残念ながら45歳で早世したため、志行は世に出ることができなかった。死後も1994年に故郷瑞浪市で遺作展が開催されたのみである。

日本水彩画会の創立に参加し、太平洋画会会友であった志行は、私にとって無縁な存在ではない。今年は太平洋画会(現太平洋美術会)創立110周年にあたっていて、志行のことを紹介するにはいい年である。

私がこの紙面を担当するのは今回が最後になった。志行に会ったことを書くことができて幸運であった。

(学芸員:佐藤聡史)



## 宮地志行 (みやち・しこう)

1891年岐阜県土岐郡日吉村(現瑞浪市)生。本名景樹。18歳で上京、岡精一に師事。中村不折、高間惣七にも学ぶ。1913年日本水彩画会創立に参加。ラジオ雑誌、時事新報、雑誌「少年」、「少女」、「主婦之友」などの挿絵を担当。1930年太平洋画会会友推挙。1933年銀座で個展開催。1936年病没、享年45歳。

油彩、水彩のほか、郷土の半原人形浄瑠璃で使われる操り人形の製作なども手がけた。1994年に瑞浪市総合文化センターで遺作展。

## — 目 次 —

宮地志行	1
館長日記	2
友の会幹事紹介	3
梅野さんの置き土産	4

「梅野記念絵画館の美展」	4
今西中通顕彰への道	5
荒井茂雄展	5
古田恵美子展	5
来館者・スケジュール・ノートから	6



大雪の北御牧地区

## 館長日記

梅野記念絵画館 館長 佐藤 修



なにはともあれ雪のことを書かねばなるまい。幕開けは2月9日であった。東京・中野での「友の会オークション」の開票日である。前日から降り続いた雪は一向に止む気配なく、車で行くはずも高速は完全ストップ。しかしどうあっても「行かねばならぬ」のである。——朝の6時半

にタクシーに来てもらい、上田まで。そこから新幹線。中野にはどうにか間に合った。

その騒ぎも今から思えばほんの軽い序章であった。

14日午後から再び降り始めた雪は、優に80センチは越えたであろう。家の前の道は誰一人通らずただただ雪を積もらせるばかり。待てど暮らせど除雪車は来ない。来たとしても一どきには除けられぬほどであることは素人でもわかる。ましてやここ芸術むらは市の中心部からヒトヤマ上った台地の上。除雪車がここまで来るには当分かかるだろうと思うしかなく、皆家に閉じこもり、人の気配が消えた。陸の孤島と化したのである。

救急も消防も来られない状況が3日続いた。幸いにも近隣に、火事だの病人だのという不慮の騒ぎがなかったから良かったが、そうでなかったらと思うとぞっとする。近所を繋ぐ電話の存在をこんなに有り難いと思ったことはない。そして隣も元気である、ということはこんなにも人を安心させるものだということを知らされた。

大事なことが後回しになった。「絵画館の雪害は無し」ということを報告しておかなければならない。木道の傍の松の木が、雷が落ちたように幹の途中からぱっきりと折れ、折れた上半分は雪に頭を突っ込んでいる。今日は3月の13日である。もうひと月がたつというのに、裏の身障者用の林道は未だに雪が溶けやらず軽自動車がやっとの道幅である。80年に一度という雪であったという。ならば私の年齢からすると、もう二度と経験できないことになる。

それにしても近年の自然気象は極端に過ぎるのではないか。文明ってモンのせいならば、引き返すわけにはいかないものか。

さて話は戻って、冒頭の2月9日の友の会オークションの報告である、今年も200点に及ぶ出品数であった。

それは十分な数であったが、今年は公開日を1日縮めた。加えて大雪である。いつもは開票日には顔を見せる長野グループ、埼玉グループが足を奪われ、参加者はいつもより少ない。当然のことながら、売上ダウンを覚悟した。ところがそうはならなかったのである。会場に来れなかった人がFAXや電話で“不在者投票”をしてくれたお蔭である。このことはこのオークションが友の会の定例行事としてしっかりと根をはっていることの証と云えると思う。

余談だが、私も3点買った。一つは小室浩「漁村風景」。油彩のF10で2万円である。名の通り漁村の風景であるが妙に家並みに異国情緒が感じられ、その穏やかさに惹かれた。競合者がなく落としたが、作家については全く知らない。後日調べてみると元台湾の美術学校の校長を務めた人物であることがわかった。ひょっとしたらこの風景も台湾かもしれない。愛知県美で個展を開催している。1921年東京生まれとあるからもう亡くなっているだろう。

二点目は、しらいみのるという画家のSMで「できごと」という題の油彩画である。裏に自由美術家協会会員とある。色使いに惹かれて買ったが何の出来事なのか、画面を覗んでいるのだがよくわからない。ちなみに価格は1万円である。

三つ目は中村忠二。1951年作の水彩デッサンである。1万4千円で落とした。実は忠二の花の絵を出品しどなたか買って戴いた。その一方でまた忠二を買ってしまうのだからつける薬はない。やっかいなものである。



オークション会場

# 友の会幹事紹介

## － 大竹 永明さん －



これまで、「アートの風」誌上や館のイベントなどで、わたしの梅野先生や梅野記念館との関わりについて大方の話は既に書いたり喋ったりしたので、ここで何を書いたらいいのやら。

わたしが梅野先生と出会ったのは、平成元年の暮れから翌2年早々にかけての頃。そして平成9年12月に藝林が閉廊したから、藝林には8年間通ったことになる。そして平成10年4月に梅野記念絵画館が開館し、先生が亡くなられたのは平成23年7月28日だから、13年余り北御牧へ通ったことになります。毎日通ったわけではないけれど、最低でも月に一回くらいは行ったと思う。

その後も記念館に今度は館の運営のお手伝いも兼ねて行っています。もう先生と楽しく絵の話をするのは出来ないけれど、先生の願いを記念館が引き継いでいくよう、微力ですがお手伝いしようと思っています。

せっかく紙面をいただいたので、これから先、梅野記念絵画館がこんな美術館になってほしいという、わたしの願いを述べようかな。

以前も書いたことですが、美術史の表面に現われない優れた作家を紹介し続けていくことです。わたしは「美の狩人」を読んで、どれだけ今西中通に魅せられたか。正統に美術史に登場する作家は各地の美術館で何度も展覧会が開催されるでしょう。そんな作家を梅野記念館でやる意味はない。早世したり反逆し

たり異色であったり世間から無視されたり、何らかの事情で世間から忘れられながらも純粹に生きたキラッと光る作家を取り上げてほしい。今までどこの美術館も取り上げていないそうした作家の展覧会の企画展を、梅野記念館で最初に開催してほしい。そして図録を作成し、この美術館の業績として形に残し、後世の評価に委ねることが重要かと思っています。今回の庄司貴和子展は、その意味で素晴らしい展覧会だったと思います。そうした仕事を継続していけば、梅野記念館は仮に規模は小さくとも全国の美術館のなかで異彩を放つ美術館として尊敬を払



今西中通「フサ像」

われるでしょう。

そして未だ埋もれている全国の優れた作家の情報を梅野記念館が持つことです。これには全国にいらっしゃる梅野先生とお付き合いのあった美術愛好家の皆さんの力をお借りすることも必要かと思っています。いい仕事しても世に出ない作家はたくさんいます。そうした陽の当たらない見直されるべき作家のデータを持ち、他の美術館や研究者の照会に答えることができれば、やはり価値ある美術館として生き残ることができると思います。

そうした作家たちの代表作を含むコレクションを取蔵することができれば、のちのちとんでもない美術館になるのではないかと思います。それは一朝一夕には無理なことですが、梅野先生の父上が誰も見向きもしなかった頃に買い集めた青木繁の作品が、ウン十年経って現在の評価となったように、真に美しいものであれば可能だと思います。

梅野隆という人は、卓越した絵を見る眼を持っていましたが、それと同じになるのは無理としても、その仕事を総括して後世に引き継いでいくことが必要だと思います。



今西中通「放浪」

堅い話はここまでにして。

絵は自分のレベルでしか分からない。でも、それでいいのではないですか？何も美術史の理屈で絵を見るだけが絵画の鑑賞法ではない。芸術とは人の心を打つものです。理屈は後からついてくればいい。

展覧会を見に来て、たった一枚の絵が自分の心に響いてきた。夫婦や恋人や子供と一緒に訪れて、一枚の絵の前で語り合えた。それだけで十分に美術館に来た甲斐があるのではないですか。

梅野記念館の環境は素晴らしいですね。ロビーから見える浅間山は圧倒的な存在感があり、芸術むら公園は四季とりどりの美しさに溢れています。

こんな素敵な美術館で、お茶を飲んで、散歩して、そして絵を見て。心を許せる相手と一緒にでもいいし、ひとりでのんびりしてもいい。

梅野記念絵画館は無限の可能性を秘めています。みんな愛情を込めて支え合っていければと思っています。



# 梅野さんの置き土産

——澤 藤 勝 行——

眼の人梅野隆さんがその生涯の最後に発掘したのが荘司貴和子さんであった。

梅野さんは生前念願したが、叶わなかった「荘司貴和子展」が佐藤修館長の手で梅野記念絵画館で開催されることになり、見に出掛けた。

梅野さんは発掘した貴和子さんの「玄海の月」を館長室に架けており、作品のその素晴らしさには魅せられていたのだが、一堂に集められて十分なスペースを取って展示されている作品群を見て、その才能の巨きさ、豊かさに驚き、かつ深い感動を覚えずにはおれなかった。

モダンで斬新な形。清澄・清明な、情感あふれる色。暗香をも把える鋭敏な感覚。粋なセンス。大胆極まりない構成

敷島大和の山河・文化に寄せる熱い思いがあり、祈り——再生・救済・輪廻願望を胎む——が熱く、魂の画家でもあった。

これは、貴和子さんの原爆の悲惨——島原疎開——の間接経験の深さによるものなのであろうか。

この祈りの絵画は、東日本大震災被害に遭われた人達のつらい心の支え、救いともなるような深いものがある。

テーマのエッセンスを形や色で、あるものは典雅に、あるものは雄渾に、またあるものは幽玄に、多彩に表現している魅力。モダンなセンス——ザックリした形、縫いしろのような形やすがれた生地の色、ほつれた糸のような線——は、時代に先駆けてジーンズを愛用したことにもつながるものがある。

暁や御霊の戻る気配かな  
人の“わ”や篝火の闇笛太鼓  
天も聴かん幼子の魂お救いを  
月叶えん熱願再生水の底

豊かで深い抽象絵画の世界を生み出した要因には、義理の母親荘司福との画業の棲み分けが預って力があつたと私は考える。二人の画家の才能のおのずからなる違いが日常生活を共にすることによって、意識するしないは別として、相互に刺激し合って、おのおのの画業の深化を生み出したと考えるのである。そこに生れたのが荘司貴和子さんの稀有な、清冽な、半抽象の世界である。

荘司貴和子さんは、依屋宗達に果敢に挑み、挑戦したのではなかったか。夭折を余儀なくされてしまったが。しかし、39才にして、宗達を彷彿させる、スケールの大きな作品を生んでいる。もし円熟に達するまでの天命に恵まれたならば、その乾坤は、正に端倪すべからざるものになっていたであろう。その自由闊達な、天衣無縫の荘司貴和子さんを見られなかったことは惜しみても余りあるものがあるが、荘司貴和子さんは、モダン宗達であると云っても過言ではない。

荘司貴和子さんほど高邁な気宇を以って宗達の世界に迫った者はいないのであるから。

終りに、梅野隆さんの生涯を賭した慧眼に敬服するばかりであることを申し添えておく。(1月9日：記)

## 「梅野記念絵画館の美展」

梅野コレクションを中心に72点が飾られた。どれもこれも梅野隆が恋人を探すかのように焦がれ集めた作品と、そんな梅野を慕うかのように色々な方から寄せられた寄贈・寄託作品である。

中でも来館者の話題に上ったのは昨年末から今年1月にかけて開催した「荘司貴和子展」の主役荘司貴和子の作品「玄海の月」である。この作品には深い思い入れとエピソードがある。

梅野は今から36年前、東京の画廊で開かれた荘司貴和子の遺作展を見て、天才がいたと驚くのである。当時彼女の才能を認めていた加山又造は芸術新潮にこう書いている。

「稀有の才能に満ち」「単純極まりないのに、典雅で、えらくしゃれた感じ」「日本画という制約の多いとも思える素材、技法で、日本画のみが可能と思える抽象作品を、地道に、しかも才能豊かに、一貫して発表しぬいて居られ」「胸をときめかして見たのである」

荘司貴和子を発見して以来、梅野は彼女のことを誰にも語らず、ひとりで荘司貴和子を探すのだが、巷には出てこない。ご遺族に絵を見たいと手紙を出したが話が進展しないままに月日は過ぎた。

平成21年ごろ、毎日オークションのカタログに荘司貴和子の名を見つけた梅野は、喜び勇んで東京・有明のビッグサイトの会場まで出かけ、ついに「玄海の月」を手に入れるのである。

梅野はこの“恋人”の展覧会を夢見たが、平成24年に亡くなった。その翌年の春、ご主人が当館を訪ねて来られ、あとはとんとん拍子に話は進み。展覧会が実現するのである。

不遇に終わった画家の再評価」を求めるといふ梅野のテーマも、作品が手許になくは絵に描いた餅。ご夫君のご決断によって遺作品が提供され、さらには全点の寄贈という望外のお志を頂戴することとなった。梅野記念絵画館の執念は美神に通じたのである。

副館長 佐藤 雅子



会場風景

## 今西中通顕彰への道

今西中通は、梅野コレクションの中でも、その蒐集の始まりともいえる記念すべき作家である。

昭和40年ごろ、一枚の銀色に輝く美しい風景画に梅野は出会った。そこから今西中通の作品蒐集が始まった。今西の遺族・久仁子夫人と会い、芸術への思いが強く匂い出ているデッサンの数々に魅せられ、それまで蒐集した作家のものを売り払って、今西研究に没頭していったのである。今西を世に出すべくS画廊を説得する。その後S画廊から、今西の絵を全部売ってくれといわれた久仁子さんは梅野に相談する。「半分取っておきなさい。画廊が市場に出してくれたら高くなる。そうしたらもう半分を売いなさい」と梅野はアドバイスをした。その結果、今西の名は絵好きのコレクターに知られるようになり、展覧会が開かれ、画集が出来るまでになる。

今回の展覧会には、不思議な縁で梅野が買うことになった薔薇の絵も展示した。今西を発見してからなんと20年の後に、他の人に渡っていた薔薇の絵が梅野の元に戻ってきたのである。この絵は今西の最晩年に描かれた13枚の薔薇の絵の1枚と言われている。

副館長 佐藤 雅子



今西中通「薔薇Ⅱ」

## 4月からの展示案内

### 人生の詩 荒井茂雄展



「彼の仕事に具象絵画だの抽象表現主義だのシュルレアリスムのポップアートだのといったイズムの仕分けは無用なのだ。ただ描きたいように描き、作りたいように作る。まるで子供のように発想も表現も思いのままの遊び心で描かれ、作りだされていく。」(林紀一郎氏「人生の詩」荒井茂雄著より)

鮮やかな色彩の花や鳥、ユーモラスに配置された廃材、これら荒井茂雄の作品を見事に言い表している。荒井茂雄は常に現在にあって、今もなお変化し続けている。

荒井茂雄：1920年現東御市生。戦時、横須賀で行木正義を知る。戦後、行木の誘いで猪熊弦一郎に師事。新制作協会会員。猪熊弦一郎現代美術館相談役。

会期：4月12日(土)から6月15日(日)

ワークショップ：ボックスアートを作ろう。5月10日(土)、11日(日)

詳細はホームページまたは電話にて

### 古田恵美子展

4月12日(土)～6月15日(日)

古田恵美子は1950年(昭和25年)の生れ。いわゆる団塊世代です。北海道の滝川で生れ、千歳で幼少時代を過ごしました。父親の勤務先が変わるたびに住まいを転々とし、結婚後も夫君の仕事の関係で転居を続けますが、どこにしようと描かれた絵の底流には生れ故郷北海道の風景が想像され、茫漠たる大地の匂いが消えることはありません。

女流画家の多くが“女流ならでは”の感性の世界に入り込んでいく中で、生きることと、生きた軌跡を残す、生きることそのものを問う重いテーマと格闘する画家である。自らの制作活動を「何処へ」と客観視し、変わりゆく時流から距離を置き、漂泊者のごとき孤独な歩みを続ける画家・古田恵美子の、生きて来た軌跡を辿り、その「今」を照らします。

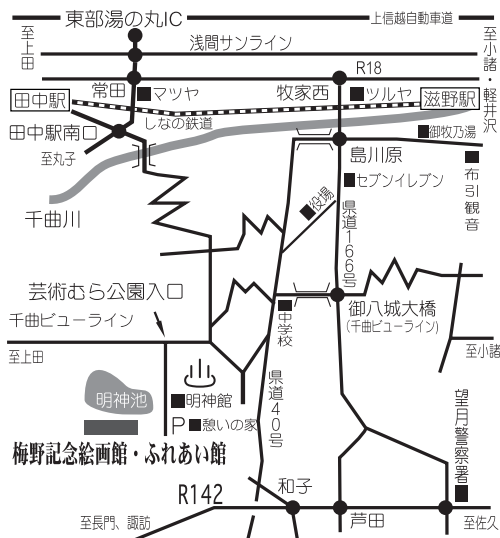


「時…大地」

月/日	行事	来館者
1/7	柳澤幹夫さんによる生花	
1/11	15時～「2014、NewYearConcert」 (ホール貸) チェロ：北沢加奈子さん ピアノ：井垣里沙さん	上田市清明小学校 宮下先生 小諸高原美術館 学芸員 星野さん
1/12		元東御市教育長 星合さん
1/13	友の会新年の集いバスツアー 13時～ 一点展ギャラリートーク 14時～ 新春寄席 立川談慶独演会 15時～ 新年会(憩いの家)	荘司 華さん
1/15	収蔵品整理、収蔵庫修繕の為休館 ～2/22まで	
1/19	友の会幹事会(東京支部)	
2/8	友の会オークション (東京・ギャラリーKANI～9日)	
2/22	梅野コレクション展・今西中通展 初日	
2/26	北御牧保育園 年長39名 職員5名 ガンダ対話型鑑賞 館職員：佐藤学芸員、大塚	東信ジャーナル 中西さん取材

## ~~~~~[ ノートから ]~~~~~

- ・冬の梅野記念絵画館も素敵！長生きしてよかった。(匿名)
- ・近くにいながら失礼いたしておりました。ありがとうございます。楽しませていただきました。やっぱりここは素敵です。ゆっくり絵を観させていただきます。(Tさん)



### 交通のご案内

【お車で…】上信越道東部湯の丸ICより約20分/中央高速岡谷ICより142号線経由 約1時間  
 【鉄道で…】長野新幹線 上田にてしのの鉄道乗換  
 タクシー利用 滋野駅下車 約20分  
 ※平成18年10月1日よりバスの運行がなくなりました。

## スケジュール

### ●大展示室●

- ・人生の詩 荒井茂雄展 4/12(土)～6/15(日)
- ・横井弘三展 6/21(土)～8/31(日)

### ●ふれあい館●

- ・何処へ・・・ 古田恵美子展 4/12(土)～6/15(日)
- ・横井弘三展 6/21(土)～8/31(日)

### ●ギャラリー●

- ・何処へ・・・ 古田恵美子展 4/12(土)～6/15(日)
- ・横井弘三展 6/21(土)～8/31(日)

### ●小展示室●

- ・青木繁展・菅野圭介展 常設

### ●イベント●

- ・友の会総会 4/20(日)
- ・荒井茂雄展ワークショップ「思い出ボックスアート」を作ろう！  
5/10(土) 13時～ 5/11(日) 9時～ 各回10名  
参加費1500円(大きさにより若干プラス)(要予約)
- ・古田恵美子展ギャラリートーク  
5/18(日) 13時半～(要予約)
- ・横井弘三展ギャラリートーク 6/22(日) 14時～(要予約)

### 休館日

- ・4/1(火)～4/11(金) 館内修繕・展示替えのため休館

### お知らせ

- ・4/29(火)～5/6(火)は休まず開館いたします

### あとがき

もうこのまま、雪に覆われたままなのかと思っていた。白い世界のままなのかと思っていた。暖かい土色を見られるのはいつのことになるのだろうかと思っていた。でも、雪は溶けるものなんだなあ… 日に日に太陽の光は強く温かくなり、地表が現れたときは嬉しくて、懐かしくて、愛おしい気がした。

春は心が不安定になる。希望と不安が自分の中にも、周りの人々の中にもあるからなのだろうか。

「いつも心が よろこんでいるかな？」荒井茂雄先生が2007年に出された本の題名である。私はこの本が大好きで、この本の中の言葉に励まされている。先生は「私の文も作品も互いにはげまし合う私の仲間です。私の作品はみんな言葉を持っています。」と言っている。4月から始まる荒井茂雄展の作品たちは、どんな言葉を持って絵画館を訪れてくれるだろう。今、私はとても楽しみに待っている。

編集 大塚裕子

### 梅野記念絵画館 友の会

〒389-0406 長野県東御市八重原 935-1  
 電話 0268-61-6161 FAX 0268-61-6162  
 ホームページ：http://www.umenokinen.com

開館時間：午前9時～午後5時

休館日：毎週月曜日、祝日の翌日

(月曜が祝日の場合はその翌日、展示替期間、年末・年始)

入館料：一般800円 団体700円(小中学生半額)

平成14年7月13日(土)より市内小中学生は土・日・祭日・長期休業が入館無料となりました。